

TK ドラゴンズ少年野球団の指導方針



野球だけをさせない

小学生の時期というのは、子ども達にいろいろな選択肢を見せてあげる時期だと考えています。いろいろな引き出しを開け、「楽しい」・「楽しくない」、「できる」・「できない」、「やりたい」・「やりたくない」、といったことを子ども達に感じ取ってほしいと思っています。その中で、興味のあるものを見つけることができたなら、その子どもの心は豊かに成長していくのではないだろうかと考えています。

週1回3時間程度という活動時間は、今の少年野球事情から考えれば、非常に少ない時間です。しかし、野球をひとつの引き出しととらえていただきたいのです。あまった時間を他の何かに費やすことが可能ですし、野球の自主練習をすることも可能です。

野球を好きになってほしい

野球の引き出しを開けてくれた子どもたちには、できれば「野球は楽しい」と感じてほしいと思っています。

試合に勝つことは野球の楽しさのひとつではありますが、それが全てではありません。他にもいろいろな楽しさがあり、その楽しさが積み重なった結果が「試合に勝つこと」に結びつくと考えています。

例えば、ホームランを打つ喜びは、打った人にしかわからないものです。ボールがフェンスを越えていく快感を味わった日から、本気で素振りがしたくなるものです。

空振りの三振をとる喜びはピッチャーにしかわからないものです。全力で投げたボールにバットが空を切る快感を味わった日から、本気でキャッチボールがしたくなるものです。

他にもあります。流れるような動きで、ボールをさばいた時の喜びは、キャッチャーにしかわかりません。ピッチャーの癖を見切ってスタートを切り成功した盗塁の喜びは、ランナーにしかわかりません。

子どもの体力や運動能力で差はありますが、ゾクゾクする体験は与えることができます。そして、その楽しさがその子どもの将来の野球観になると考えています。

個性を活かす

バッティングフォームやピッチングフォームは、基本的に修正しません。

故障の発生する可能性がある場合は修正しますが、それ以外は自由なスタイル・自然なスタイルに任せています。

骨格や、性格や、趣味や、体力で体の動きは変わります。基本的な動きの指導は行いますが、個性をなくすことや全員に同じ動きを求めることは行いません。

素振りやキャッチボールで必要な筋肉をつけることを優先しています。

子どもをやる気にさせるのは指導力の力

いくら人に言われても、結局自分がやる気にならなければ、何事も上達しませんし、やる気になったときや楽しいと感じたときは、やめろと言われてもやめられないものです。

「やる気を出せ」と言うのではなく「やる気にさせる」のが指導者の役割だと考えています。

受けるほうも発信するほうも、個人個人で持っているアンテナは違います。いろいろな方法で様々なタイプの子も達にやる気を出させる努力を、指導者は惜しんではいけないと思っています。指導者といえども、考え悩み努力してこそ、子ども達に認められ、周りにも認められる指導者になれるのだと思っています。

最終学年

6年生になって初めて「勝ちにいく野球」を経験させます。「楽しい野球が通用する」という自信を持たせて送り出したいと思っています。

たまたま勝つことと、勝ちにいて勝つことは全く違います。責任感やプレッシャーの中で勝つことの難しさと喜びを味わってほしいと思っています。

毎年、年末に「きぬかけ杯」という卒団試合を行います。夏ごろから、きぬかけ杯で優勝するための練習を行います。それまで身に付けてきた技術を応用した戦略を立て、監督・コーチ・選手が一丸となって勝つことの喜びを経験させることが狙いです。もし負ける悔しさを与える結果になったなら、子ども達に謝ります。チーム全員が責任感を持って試合に臨むことの大切さを少しでも感じてほしいと思っています。子ども達に本気で「勝ちたい」と思わせることができるかどうか、指導者の愛情・情熱・能力が問われる試合でもあります。